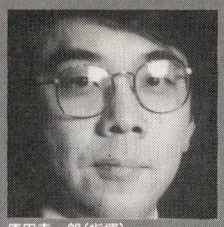
アマチュアオーケストラ 新交響楽団第137回演奏会
The New Symphony Orchestra the 137th Concert


原田幸一郎(指揮)


野島　稔(ピアノ)

指揮:原田幸一郎
HARADA Koichiro, Conductor

ピアノ独奏:野島　稔
NOJIMA Minoru, Piano

ウェーバー・歌劇「オイリアンテ」序曲
Carl Maria von WEBER : Overture to "Euryanthe"

バルトーク:オーケストラのための協奏曲
BARTOK Bela : Concerto for Orchestra

ブラームス:ピアノ協奏曲第1番ニ短調
Johannes BRAHMS : Piano Concerto No.1 in d-minor

1992年10月4日(日)2:00p.m.
Sunday, October 4, 1992 at 2:00 p.m.

東京芸術劇場大ホール(池袋駅西口下車)
Tokyo Geijutsu Gekijo Main Hall (Ikebukuro Sta. West Exit)



アマチュアオーケストラ

新交響楽団第137回演奏会

The New Symphony Orchestra The 137th Concert

指揮：原田 幸一郎

HARADA Koichiro, conductor

ピアノ独奏：野島 稔

NOJIMA Minoru, piano

ウェーバー：歌劇「オイリアンテ」序曲 (1823)

Carl Maria von WEBER : Overture to "Euryanthe"

Allegro marcato, con molto fuoco

バルトーク：オーケストラのための協奏曲 (1943)

BARTÓK Béla : Concerto for Orchestra

第1楽章 Introduzione 序章
Andante non troppo - Allegro vivace

第2楽章 Giuoco delle Coppie 対の遊び
Allegretto scherzando

第3楽章 Elegia 悲歌
Andante non troppo

第4楽章 Intermezzo Interrotto 中断された間奏曲
Allegretto

第5楽章 Finale 終曲
Pesante - Presto

休 憩
intermission

ブラームス：ピアノ協奏曲 第1番 ニ短調 作品15 (1858)

Johannes BRAHMS : Piano Concerto No.1 in d-minor

第1楽章 *Maestoso*

第2楽章 *Adagio*

第3楽章 *RONDO Allegro non troppo*

1992年10月4日(日) 2:00p.m.

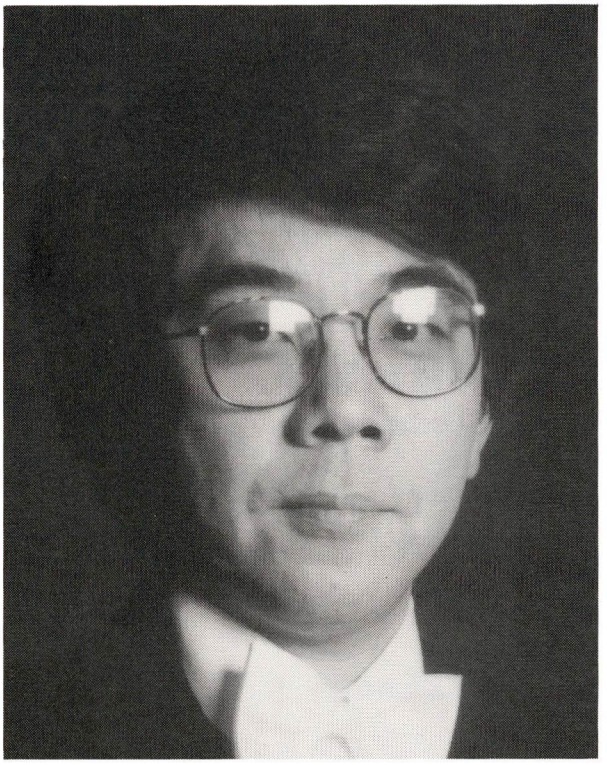
東京芸術劇場

主催：新交響楽団

●指揮

原田 幸一郎

HARADA Koichiro, conductor



1945年生まれ。桐朋学園とジュリアード音楽院で斎藤秀雄、秋山和慶、ドロシー・ディレイ、イヴァン・ガラミアン氏らにヴァイオリンと室内楽および指揮法を学ぶ。

69年から12年間、東京クワルテットの第1ヴァイオリンをつとめ、エディンバラ、ルツェルン、タングルウッドをはじめ数多くの有名な国際的音楽祭に出演するなど、世界の檜舞台で常に高い評価を受けてきた。

81年に東京クワルテットを離れ、クリーヴランド音楽院のヴァイオリン科主任教授とイェール大学、アスペン音楽祭でも教鞭をとりつつ、室内楽奏者としてニューヨークのリンカーン・センターやワシントンD.C.等のコンサートで広く活躍。また81年以来アスペン音楽祭の教授陣に加わっている。

83年から日本に居を移し、ソリストおよび室内楽奏者として内外で活躍。さらに86年には数住岸子と"NADA"(ナーダ)室内楽シリーズをスタート、従来にない高度なアンサンブルを誇っている。

88年4月、九州交響楽団の〈モーツァルト定期〉で指揮デビューを飾り、翌月の新日本フィル〈ハイドン定期〉の東京デビューも好評を博した。

90年には新日本フィル定期デビューと〈ハイドン定期〉への再登場、〈倉敷音楽祭祝祭管弦楽団〉等を指揮。91年4月には新日本フィル定期にも再登場。

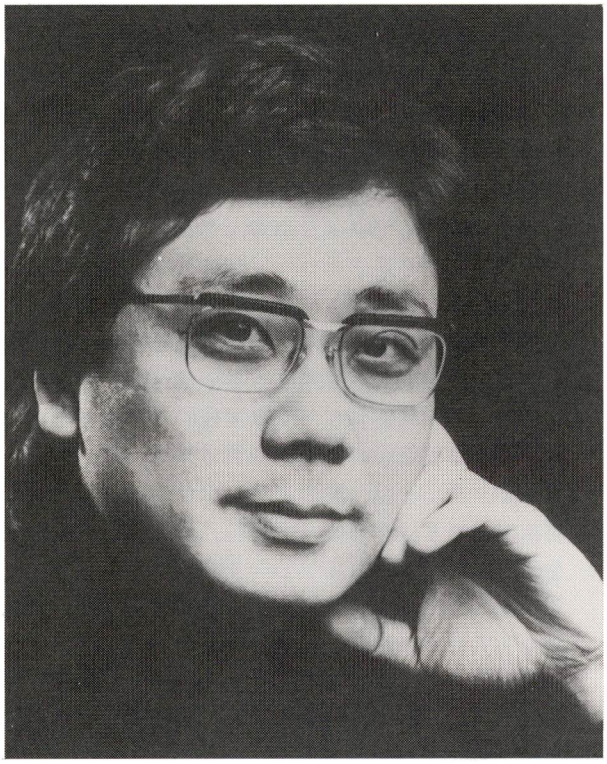
室内楽奏者として永年培われた、豊かで暖かな音楽性とアンサンブルでの明敏で細やかな感受性は、他の指揮者と一線を画するところである。現在、桐朋学園助教授。

新響とは89年10月にドヴォルザークのチェロ協奏曲(独奏:毛利伯郎)他、90年10月にシベリウスのヴァイオリン協奏曲(独奏:漆原朝子)、チャイコフスキーのマンフレッド交響曲他、91年11月にはベートーヴェンの交響曲第7番他で毎年共演しており、今回は4度目。一流の室内楽奏者ならではの高い音楽性と的確なアンサンブル指導で団員の信頼はきわめて厚い。

●ピアノ独奏

野島　稔

NOJIMA Minoru, pianist



1945年横須賀市に生まれる。３歳からピアノを始め、桐朋高校、大学、旧ソ連留学まで井口愛子氏に師事した。高校３年の63年、第32回音楽コンクール第１位大賞受賞。66年旧ソ連文化省の招きでモスクワ音楽院に２年間留学、レフ・オボーリン氏に師事した。1968年海外派遣コンクールに優勝、69年第３回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで第２位に入賞。翌年70年ニューヨークのカーネギーホールでデビュー・リサイタルを開き、大成功を収め、ニューヨーク・タイムズで高く評価された。以来、ニューヨークと東京を本拠に、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの各地でリサイタル、オーケストラとの共演、室内楽などの活動を行っている。ヴァン・クライバーン・コンクールには1981年と1985年に審査員として招かれている。

日本を代表する国際的ピアニストであり、ＮＨＫ交響楽団など、日本の主要オーケストラとの共演は数多い。新日本フィル、東京交響楽団、ＮＨＫ交響楽団など各オーケストラの海外公演にもたびたびソリストとして同行、88年春には東京都交響楽団ヨーロッパ公演に参加した。

86年２月にはひさびさにモスクワに渡り、松村禎三のピアノ協奏曲第２番を演奏、88年５月にはレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）で開かれた第３回国際音楽祭に招かれて再び松村の協奏曲を演奏し、いずれも最大級の賛辞を集めた。

ＣＤ録音にも力を注いでおり、88年には「野島稔・プレイズ・リスト」を、90年には「野島稔・プレイズ・ラヴェル」を発売し、〝まぎれもない傑作〟（ステレオ・レヴュー誌）、〝世界最高のラヴェル演奏の一つ〟（レコード芸術）と内外で激賞されている。

近年のめざましい充実ぶりからも、ピアノ芸術の真髄を伝える貴重な演奏家として今後のいっそうの活躍が期待されている。

新響とは初の共演。

ウェーバー：歌劇「オイリアンテ」序曲　Carl Maria von WEBER : Overture to "Euryanthe"

『芸術の秋』にふさわしい今回の重厚なプログラムの冒頭を飾るのは、ドイツ・ロマン派国民歌劇の基礎を確立したカール・マリア・フォン・ウェーバー（1786－1826）の歌劇『オイリアンテ』序曲作品81である。

ウェーバーはドイツロマン派の初期に位置する作曲家で、交響曲や管弦楽曲、室内楽、ピアノ、声楽曲も残しているが、後世からの視点に立てば特に注目されるのがオペラ作曲家としてのウェーバーである。彼はドイツ語による民族的なオペラを確立したという点で、リヒャルト・シュトラウス、ワーグナーといった巨大で豊穣な山並みへと続くドイツ・ロマン派オペラの創始者として音楽史上重要な作曲家である。

ウェーバーの幼少時代、彼の父親は移動歌劇団のヴァイオリン奏者兼指揮者兼歌劇団監督として南ドイツ各地を巡業していた。このため、カールは幼い時からさまざまな国籍の劇音楽の雰囲気にごく自然に親しむことができた。しかし、当時のヨーロッパで上演されるオペラはほとんどイタリアオペラばかりであった。ドイツ語を用いたものはモーツァルトの『魔笛』やベートーヴェンの『フィデリオ』程度という状況で（オペラを数多く作曲したザルツブルク生まれのモーツァルトでさえドイツ語オペラはあと『後宮からの誘拐』『劇場支配人』などがあるだけで、他はみなイタリア語による）、さらにほとんどのオペラの題材は、ドイツ人の日常からほど遠いものばかりだった。

こうした状況にウェーバーは徐々に不満を感じはじめ、母国語のドイツ語を用いた『地元密着型』のすぐれた作品を聴衆に聴かせたいと思いはじめた。幸い旅先でヨーゼフ・ハイドンの弟ミヒャエルなど、各地の高名な音楽家に師事して古典的な作曲技法も身につけていった彼は13歳のときに早くもオペラを作曲しはじめ、その後ドイツ各地の歌劇場指揮者としてのキャリアも生かしてドイツ民族オペラの作曲家としての道を選ぶことになった。

ウェーバーはベートーヴェンと同時代に生きた人だが（彼の死はベートーヴェンより１年早い）、ベートーヴェンがバッハ以来のドイツ音楽の伝統的手法――動機的発展や対位法――の上に思索的・内面的な方向を展開していった一方、ウェーバーは古典的な基礎を大筋で踏まえつつ、旋律に霊感的気迫を与え、それまでになかった斬新な色彩感を肉づけしてドイツ・ロマン派音楽の新しい世界を開拓していったのである。実際、ブルックナーのシンフォニーやワーグナーの楽劇にでてくる神秘的な森の描写の先駆的表現を『魔弾の射手』や『オベロン』に聴くことができる。また、彼の音楽における劇的・叙情的な表現の試みは、後の『交響詩』のジャンルの大きな礎ともなっている。

さて、歌劇『オイリアンテ』は1823年の作品で、オイリアンテの愛を信じて疑わない将軍アードラール伯がさまざまな試練を乗り越えて最後に勝利をおさめるという13世紀フランスの伝説に関する作品である。このオペラは台本が稚拙なために成功作とはいえないというのが定説だが、この序曲はウェーバーの作品のなかでも演奏される機会が多い。なお序曲中の２つの主題はともにオペラから採られている。

大場　進（チェロ）

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、トランペット2、ホルン4、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部

新響がベルリン芸術週間に参加

新交響楽団はこのほどベルリン芸術週間事務局より1993年９月に開催される同芸術週間への招待を受け、団としてこれに参加することを決定しました。

この芸術週間はドイツではミュンヘンのオペラ・フェスティバル、バイロイトのワーグナー音楽祭と並び称される国際的な催しで、来年1993年のテーマは「日本」となっています。

新響では、ベルリンで高く評価されている作曲家石井眞木氏の指揮で同氏の代表作である交響三連作「浮游する風」他２曲の邦人管弦楽曲をフィルハーモニー・ホール（ベルリン・フィルの本拠地）にて９月７日に演奏する予定です。

バルトーク：オーケストラのための協奏曲 BARTÓK Béla : Concerto for Orchestra

バルトーク・ベーラ*がブダペスト音楽院に学んでいた頃、作曲の授業はドイツ一辺倒であり、祖国ハンガリーもまた既にオーストリアの支配下にあった。R.シュトラウスの影響を強く受けながらも、人一倍国を愛する気持ちが強い彼は、自己の語法を確立できず悩んでいたが、1905年コダーイ・ゾルタンとともに本格的に始めた農民音楽の調査研究に明るい光を見出した。農業学校長の息子だった彼にとって土に根ざした農民の中でのフィールドワークはこの上なく楽しく「最も幸福な日々だった」と後年しばしば述懐している。

とりまく自然は、病弱だった幼い頃に熱中した昆虫・草花などの自然観察を思い起こし、そこで培った物事の本質を見極める研ぎ澄まされた感性にさらに磨きをかけた。加えて決して妥協を許さないほど厳格であったが、それだけにきわめて誠実で忍耐強い人柄は農民たちの心を解きほぐし、着実に成果を積み重ねていった。苦しい労働の中に生まれ、長い年月にわたる喜怒哀楽が織り込まれた農民たちの音楽は、驚くほど多彩で音楽の根源的な美しさが凝縮していた。芸術音楽にも匹敵する——あるいはそれまでの芸術音楽にはなかった——価値を丁寧に拾い集めて自分のなかに刻み付け、それまでの迷いから脱し広い人間愛に根ざした独自の語法を確立していった。

しかしそんな彼の晩年はきわめて悲劇的だった。ファシストに蝕まれた祖国を捨てて1940年にニューヨークに移り住んだものの、大都会の喧騒は彼の肌合に適うはずがなく、祖国を捨てた罪悪感、母を亡くした悲しみ、加えて身体は白血病に侵されて仕事も思うに任せず、まさに失意と貧困のどん底にあった。厳格な彼は援助の手を拒み続け、これを見かねたシゲティら同郷の友人たちはクーセヴィツキーを動かした。ボストン交響楽団指揮者就任20周年と70歳の誕生日を同時に迎えるこの大指揮者はバルトークの病身を気遣い、渋る彼に期限なしの条件で強引に前金500ドルの小切手を握らせ、管弦楽曲を委嘱した。

サナトリウムでの静養が幸いしたためか、あるいは久しぶりの手応えある仕事に生きる希望が甦ったのか、作曲は順調に進み、わずか2カ月弱で40分近い大作「オーケストラのための協奏曲」は完成した。

曲は5つの楽章からなり、黄金律などをとり入れた独自の強固な構成を持つが、彼の作品中もっとも色彩的に華やかであり、20世紀の名作として親しまれている。

第1楽章冒頭の動機をはじめ、随所で農民音楽から自己の語法を確立しつつあった頃の作品「青髭公の城」が引用され、その他にも5音音階によるメロディーがたびたび顔をみせる。この5音音階はオクターブの第4と第7音を抜いた音階で、東欧などの民族音楽の他、わが国でも民謡や今日の演歌の基本になっており、どこか郷愁を誘う。

また、第4楽章「中断された間奏曲」の中央部分でショスタコーヴィチのレニングラード交響曲(第7番)、またはレハールの「メリーウィドウ」のパロディーとおぼしきメロディーが顔を出し嘲笑にかき消される部分があり、その真相は明らかではないが、レハールの「(怪しげな酒場) マキシムへ行こう」と陽気に歌う歌詞の中の「愛する祖国さえ忘れさせてくれる」という一節は当時の彼の状況を考えると偶然とは思えない。

ところでこの曲を「協奏曲」と名づけた理由については作曲者自身が「さまざまな楽器を協奏的あるいは独奏的に扱おうとしたところからきている」と語っている。しかし私はさらに次のように考える。——農民音楽の最高潮・収穫の祭、そこでは〝皆が主役〟、誰もが互いに讃え合う。またさらに「青髭公」の引用は、最も実り多かった頃のこと＝彼自身の〝収穫の喜び〟を回想する。

すなわち彼はこの曲に託して、祖国ハンガリーへの狂おしいまでの望郷の念を告白しているのではないか。

上原　誠（打楽器）

楽器編成：フルート3（3番はピッコロ持替）、オーボエ3（3番はコールアングレ持替）、クラリネット3（3番はバスクラリネット持替）、ファゴット3（3番はコントラファゴット持替）、トランペット3、ホルン4、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、ハープ2、弦楽5部

＊ハンガリーの人名は日本などと同様に姓、名の順。

ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 作品15

Johannes BRAHMS : Piano Concerto No. 1 in d-minor

晴れてオーケストラの団員になったら、誰にでも1度は演奏してみたい曲というものがいくつかあるはずです。その理由としては、「目立つソロがあるから」とか、「練習しがいのある大曲である」などで、誠に勝手なものですが、その願望は次第に強くなり、曲目決定の際には毎回候補曲として登場することになります。本日の2曲目、バルトークの「オケ・コン」などは、「演奏したい曲」の上位にランキングされる常連で、特に管楽器奏者からは熱い支持を受けています。

それでは逆に、「あまり演奏したくない曲」は何か。これは私見ながら、コンチェルトの類ではないかと思われます。オーケストラ奏者からみたコンチェルトのイメージは、「独奏者が華麗な妙技を繰り広げている間、延々と白玉音符を延ばしているか、ひたすら刻んでいる」とか、「オケの出番といえばソロが演奏する前の序奏と、カデンツァの前のとってつけたような間奏だけ」などなど、誠に芳しくないものばかりです。

そのコンチェルトの中でも特に人気がないのは、どうもピアノコンチェルトらしいのです。その理由は簡単で、「通常のオーケストラの編成にはピアノがない」からなのです。オーケストラの団員には、独奏者が自分と同じ楽器だったら、オケの伴奏がどんなにつまらなくても、「名ソリストのフィンガリングやボーイング等が、目の前で見られる」とか、「ソリストの持っている名器を拝むことができる」などの特典があります。新響でも過去にコンチェルトをやったとき、練習の際にそのパートの団員が、ソリストの後をゾロゾロとついてまわる光景も見受けられました。

新響では、「コンチェルトは、オーケストラではなくソリストが主役である。団員以外のソリストが主役では、新響の演奏会にあまりふさわしくない」とか、「ソロ合わせの回数が十分にとれなければダメ」という芥川先生の考えもあって、コンチェルトの演奏回数はきわめて少なく、特にピアノコンチェルトの演奏回数は、新響36年の歴史でも両手の数に満たないほどです。6年前、私が入団してから、新響が演奏したピアノコンチェルトといえば、ファリャ「スペインの庭の夜」（芥川也寸志指揮）、そしてまだ記憶に新しい一柳慧「ピアノ協奏曲第1番《空間の記憶》」（石井眞木指揮）の2曲のみでした。そして、今回新たに、ブラームス「ピアノ協奏曲第1番」が加わります。作曲された時代、様式、国も大きく違うこれらの曲を比較することは、大変無謀なことですが、この3曲を見ただけでも、新響のピアノ協奏曲に対するポリシーが分かっていただけるのではないでしょうか。

本日演奏いたしますブラームスの「ピアノ協奏曲第1番」は、従来のピアノコンチェルトのイメージとは異なり、交響的雰囲気に包まれており、ピアノもソロとしての華麗さより、オーケストラの一部としての趣が強く出ています。その性格ゆえにか、ブラームスという有名な作曲家の初期の作品として大変充実したものであるにもかかわらず、演奏される機会はあまり多くありません。しかし、所要時間45分を越える、いくぶん翳りを帯びたこの大曲は、演奏会の最後を飾るにふさわしい風格を備えております。

最後に、オーケストラ側からも、ブラームスのこのピアノ協奏曲は高い支持率を保っているということを念のため付け加えておきます。

藤井　泉*(ピアノ)

第1楽章　Maestoso
第2楽章　Adagio
第3楽章　RONDO, Allegro non troppo

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

＊野島稔氏不在の練習時に毎回独奏者をつとめました。

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13
☎(03)3502-6551



音楽のHAPPYはL♥VEで返そう。

聴いてるだけじゃないんだと思う。ときどき一緒に歌っているし、たまに胸の奥が熱くなる。
音楽があると、淋しい部屋がちょっと明るくなって、トゲトゲした気持ちがまぁるくなったりする。
HAPPYになるんです、きっと。プレゼントをもらったらありがとうってお礼を言うみたいに、こんな幸せな気持は愛でお返ししたいね。
JASRACは著作権の管理を通して世界の音楽をたいせつに守っています。